



|                        |   |
|------------------------|---|
| Title                  | 「保育コミュニティ」の実践論理：北海道東部のへき地保育所におけるエスノグラフィー [論文内容及び審査の要旨]  |
| Author(s)              | 長津, 詩織  |
| Citation               | 北海道大学. 博士(教育学) 乙第7120号  |
| Issue Date             | 2021-03-25  |
| Doc URL                | <a href="http://hdl.handle.net/2115/81794">http://hdl.handle.net/2115/81794</a>                         |
| Rights(URL)            | <a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a> |
| Type                   | theses (doctoral - abstract and summary of review)  |
| Additional Information | There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.                              |
| File Information       | Shiori_Nagatsu_review.pdf (審査の要旨)   |



[Instructions for use](#)

## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：長 津 詩 織

主査 准教授 川 田 学  
審査委員 副査 教 授 宮 崎 隆 志  
副査 教 授 玉 井 康 之（北海道教育大学釧路校）  
副査 教 授 石 岡 丈 昇（日本大学文理学部）

## 学位論文題名

「保育コミュニティ」の実践論理

— 北海道東部のへき地保育所におけるエスノグラフィー —

就学前の保育は、小学校以降の学校教育に比して、地域的条件に左右され、施設種別の偏在や実践の多様性が生じることが知られている。特に保育所は、戦前からの季節保育所や農繁期託児所をはじめ、施設設備、職員配置、保育時間、保育内容等あらゆる側面で、地域の環境や人口構造、生業形態に適応させて固有の実践を作り出してきた。「待機児童」は一部の都市の課題であり、大多数の保育所ではむしろ乳幼児数減少への対応が焦眉の急である。中でも北海道に数多く開設されてきたへき地保育所は、2015 年の子ども・子育て支援新制度の導入もあいまって、制度的にも実践的にも岐路にある。本論文は、道東のへき地保育所 A 保育園を拠点とした 7 年半におよぶ緻密な調査を踏まえて、保育と地域の関係とその変容を実証的・理論的に検討したものである。

園児数の減少は、保育所保育指針等で陰に陽に前提とされる年齢別保育の困難に直結し、保育士は園児の経験・発達を保障すべく園の内部的努力を重ねつつ、外部との交流による新たな実践形態を模索する。その際、生活圏を共有する「地域」との関係性は、保育所・保育士が地域をどう意味づけているかを反映する。保育の政策動向と研究では、しばしば地域は「資源」と見なされ、ボランティア等の「支援者」を増やすことに積極的な意義を見出している。本論文は、こうした地域の資源的理解が、保育の論理に地域の論理を回収しがちであると指摘し、地域的条件との折り合いを不可避とするへき地保育所に焦点を当てることで、保育所の存立基盤を支えるのはむしろ保育の論理と地域の論理が重なる実践領域としての「保育コミュニティ」であるとする。そして、保育コミュニティの実践論理の生成過程に着目して、保育の地域的固有性を説明しようとする。以下、本論文の学術的意義を整理する。

最も重要な貢献は、保育が地域的固有性を帯びる過程を分析するための一連の概念を提案し得たことである（序章、第 1 章）。保育所が、制度的枠組みや指針等が示す規範によつ

て一定の標準性を志向しながらも、実際には多様な実践形態を生み出していることについては、先行研究でも指摘されてきた。しかし、それらは記述的な水準に止まっており、実践の動態を分析する概念枠組みは未整備であった。これに対し、本論文では、保育所が地域的固有性を帯びるプロセスを「地域化Ⅰ」と「地域化Ⅱ」に区分する。地域化Ⅰとは、利用児数が少ない等の直接的条件の発生を意味し、地域化ⅡとはⅠへの対処の結果として生じる新たな実践形態の発生である。地域化Ⅱは、単に客観的な条件の欠如に由来するというよりも、保育士が参照する明示的・非明示的な保育の「標準」との関係で「不足」を知覚し、それを補完する「必要」を共有する過程で生じるとされる。第4章では、地域化Ⅱの具体的事例として少人数異年齢保育の実践構造が詳らかに分析されている。

地域化Ⅱはあくまで保育の論理を満たす実践の内部的変化であるが、次なる段階として、保育の論理を共有するとは限らない地域の論理との境界的な実践領域、すなわち「保育コミュニティ」が生成する。従来も、保育現場をコミュニティと捉える例はあったが、それらはしばしば保育を一個の完結したコミュニティとみなし、外部に対して閉鎖的・排他的な構造を生み出すリスクも抱えていた。本論文で提出される保育コミュニティ概念は、保育と地域の境界に位置づけられ、それは保育所が存在することを不可欠の契機としながらも、保育の論理と地域の論理がゆるやかに重なり接触している状態を重視する。その際、必ずしも保育への積極的な「支援者」とはならない「関与者」の存在が鍵を握るとする。第5章では、20年以上にわたり頻回に開催されてきた世代間交流事業の分析を通して、事例地における保育コミュニティの生成過程を明らかにしている。

このように、保育が地域的固有性を帯びていく動態を、保育者の認識変容と地域住人の存在様式の観点から分析する枠組みを構築したことは、後続研究を刺激するとともに、保育と地域の関係を論じる研究ジャンルそのものを生み出す確かな原動力になると評価できる。

更に、戦前から戦後にかけての保育制度の変遷をたどりながら、へき地保育所の制度的位置づけと実際の存立様式の変化を明るみにし（第2章）、A保育園（1964年～）の存立過程について、史・資料分析と関係者への聞き取りにより事例地X町及びA地域の戦後史とともに丁寧に描き出したこと（第3章、第6章）は、公設でありながら資料の記録・保存義務のないへき地保育所の具体的な変遷に迫る貴重な事例研究ともなっている。終章では、保育の地域的固有性の動態的性格を改めて確認し、安易に規範化した保育コミュニティを前提としない丁寧な個別事例研究の蓄積の必要を論じながら、「保育と地域の関係」を考究する研究領域の未来を展望し得ている。

対象地域および保育所における「標準」への志向性の内実や由来、また保育コミュニティの生成過程における新たな「必要」の認識等については更なる調査と分析の余地があること等、審査過程では課題も確認されたが、本論文は、へき地保育の視点から保育研究の前提に省察を迫ると同時に、まさに地域化の渦中で保育実践の方向性に苦慮する実践者に、自己の立ち位置を捉え直す契機をも与え得るもので、学術的貢献のみならず実践的示唆にも富む優れた研究の集成である。よって著者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。